

8-7 カムイユカラ

「ミントウチカムイ イケスイモトホ (ヘムノエ)」解説

語り手：平賀さだも
聞き手・解説：萱野茂

萱野：これはあの **kamuyyukar** [神謡] でも、てだし [出だし] が **mokor kur he an?** [眠っている人か?] **monak kur he an?** [目が覚めている人か?] というふうな、あなたは眠っていますか? 目を覚ましていますか? わたくしはあなたに、こっそり、あの、話をして教えてあげたいことがありますよ。だからもし目を覚ましておるとするならば、私の言うことをよく聞きなさいよ。というようなことから、てだし [出だし] が始まっておる **kamuyyukar** [神謡] です。この **hemnoye** というのはあの、**sakehe** [繰り返し] といって、

平賀：折り返し

萱野：繰り返しのあれですね。そして、**Tokapci** [十勝] から始まってんな。うん。

平賀：そうです。**Tokapci kut ... putu ekotankorkur** [十勝の河口の村おさ]

萱野：あーなるほどね。えー十勝川の川尻に、

平賀：立派な

萱野：村を持っておる、いわゆる、今よりの言葉で言えば酋長という言葉、適当かどうか分かりませんが、酋長が夢を見た。夢を見たのは、その十勝川に非常にその、恐ろしいカッパの神様がいた。

その神様が、いつもその十勝川に行って悪さをしていけないので、なんとかそのよその村へ追い払ってしまいたいという村の人たちのその、村の人というよりもその神様の相談によってその、カッパの神様にその、無理難題を吹っつけたわけですね。それで最初にはあの、この

十勝川、上って行くとその、**cuppok wa kus pet** [西から流れる川]
という、いわゆる西側をです。いいね、西側で？

平賀：そうです。

萱野：西側を流れている川を上って行くとそこで **arasarus** [化け物熊 (?)]
という恐ろしい神様がいますから、それをその征伐するようと、いう難
題を吹っかけたらそのカップの神様は一跳びに跳んで行ってその
arasarus とほんの軽く戦ってそれも殺してしまいました。そしてまた村へ帰
って来た。これではいかんという訳で神様がまた [また] 相集って相談
をして、次にあれしたことは、

平賀：十勝川も、かっち [一番奥、水源] 行くと2つに分かれ、東側の方

萱野：**cupka... cupka wa kus pet** [東から流れる川] か。その川の上流の方
で、**saksomoayep** [大蛇の化け物] といういわゆるアイヌの考え方でい
ったら竜というか、大蛇というか、

平賀：いや、大蛇。

萱野：それがおるとのこと言った。そしたらそこへまだ、それを行って征伐
するようと言うと、その **mintuci kamuy** [河童の神] は、もう喜んで、吹っ飛んで行った。行ってみると、それには少しか、手ごわいん
だけれども、見ると、口のへり、あるいは目のふちに **hure saranpe**
a=ekaye apekor an [赤い絹を折って縫ったような] という表現が出て
いますが、口のへりや目のふちに赤いきれで、こう折り…… 赤いきれ
を

平賀：覆輪とったような

萱野：縁取りしたような、あの姿をした者が、そこへ現れて来た。それを、
んーと、その **mintuci** というカップの神様が、せんす [戦争] …… い
くさ、いくさというより戦って、その者も征伐しまして、帰って来た。
いわゆるその **saksomoayep** は負けたわけですね。そして村へ帰って来
たらまだ [また] 村の人たちが相談して、村の神様が相談して、もう1
つその、いわゆる無理難題を吹っかけた。

それはその **soya nitnehi** [蜂の化け物] と言って、蜂の……クマ蜂とか赤蜂とかそうした蜂の最もその、強い蜂へ行って征伐してきなさい、ちゅつたらその、カッパの神様考えるのには、これはここの村の、村の村おさだけがかんがえて、その私に吹っかける難題でないんだなと、きつとこれ私をこの村に置きたくないとか、まああの、それでこういうことしているらしいから、行ってその蜂の神様と戦ったんではどうも勝ち目がないと、これではどっか行った方がいいなと、そのように自分で考えて、今度はずっとその海辺を通って西の方へ下って来た。

それぞれの川の川尻へ来たら、どうですか、私に住まいを与えてくれませんかと言うとそこの川の神様は考えるのに、「こんな恐ろしい河童うちの川へ上したら大変だ」と、そうするもんだから、体よく「いや、うちの村は魚も少ないアイヌも少ない、あんたが住んでも食べ物ありませんよ。どうぞ、よそへ行って下さい」。まあ体よく断られる。

そして次から次と、行くんだけど、適当にその、あしらわれる。で、何か所かの川を、川口へ行っては、「よそ行った方がいい、よそ行った方がいい」と言われて、まあ **Sipicar** [静内] の川へ来た。

そしてまあ **Sipicar** の川へも来て、まあお願いしたら、まあ、「じゃあ上ってみなさい」と言われたのでそのままずっと上って行った。そして **Sipicar** 川の川の上流へ行ったら **poro nitne kamuy** [大きな化け物神] これはまあ、まあ、アイヌふうにと考えると鬼という考えかい？

平賀：鬼、鬼か魔物

萱野：うん、とにかくその恐ろしい魔物の魔神がおったと。そこへ行って「どうぞ私をその仲間にして下さい」。と言うと、「ああいいですよ」と、いわゆる悪者は悪者同士で、そこでまあ、住まわすことになったと。そしてそこでどうしてあの **iwan ontaro** [6つの樽] 出てくるの？

平賀：それはねえ、それを汲んでね、それを **kotan** [村] を荒らすべく、流してしまおうべく

萱野：あーなるほど。

平賀：酒買つといっても **wen kamuy** [悪い神] だからね、酒買って、大水を、留めをこしらって、それ一遍に放すのに、

萱野：あーなるほどな。

平賀：そういうことではいかんで、そんでは一遍に放されたら、そんだけの大きな水なら Sipicar [静内] 川ばかりでなく、たとえ新冠でも、どこの川でも、上がってくるんだと

萱野：あーなるほどね。

平賀：だから、大変だから、それではとても大変だと、神様がた相談の上に Porosir [幌尻岳] の

萱野：神様が

平賀：山の神様が

萱野：が呼ばれたわけね。

平賀：呼ばられた。

萱野：あーなるほどね。

平賀：それで

萱野：そして、その6つの樽に入っている水を少しずつ撒かしたわけだな。

平賀：そう、あの……

萱野：槍で

平賀：槍で

萱野：槍で穴、穴あけたり

平賀：穴あけたりして

萱野：刀で穴あけたり

平賀：サットサットこう、揺すこると少し(?) 少し撒かれたようでも、こんなに春から暮れ(?) までこうやって大水ばかり出て、いたる畑は荒らされ、ね、いたる **kotan** [村] ものってくるくらいの水だと

萱野：あーなるほどね。それを聞いてまあ **Porosirunkamuy** [幌尻の神] が来てこれは大変だと、「一度に撒かすべきでない」と言いながらまあ少しずつ撒かして、その年は、まあ、特にその大水の多い年であったと。

そしてその、カッパの神様の行く末は、何ちゅうんだ、**Poronitnekamuy** と、あれしたけれどもその、とうとう **Sipicar** [静内] 川に住まい…… 住み着いたので **Sipicar** 川の川口は、急に川へも出ずに、ブヨブヨしたような、詰まったような、そして、そこを陸(おか)だと思って子どもが走ったり大人が走ったりすると、そこへ急にその人間が吸い込まれるようにして、特に **Sipicar** 川、今の静内川だな？

平賀：そうです、そうです。

萱野：あの一、静内川にその **sarakkamuy** [水死人] という言い方、したんだ…… しておったが、これはその水死人が出る率が多いのは静内川。それは静内川に河童の神様がいるからだ、というふうにその、伝説の中ではあるんですよということ、この物語の中で言っております。

そしてこの物語の中でも大水はなぜ出るかとか、あるいはどうしてその水死人が多く出るかとか、まあいろいろなその神様はどんな顔をしてどんな姿しているか、なんちゅうことが多く教えておる **kamuyyukar** [神謡] ですね。これは **mintuci kamuy** [河童の神] だから **kamuyyukar mintuci kamuy...**

平賀：**ikesuy motoho** [逃げた理由]

萱野：あー **ikesuy motoho** という題がいいね。**ikesuy motoho** ですね。これは、**sakehe** [折り返し] は **hemnoye** というふうに使われております。